

# 博士学位論文審査要旨

2019年1月22日

論文題目： 宇野浩二の文体的特徴に関する計量的研究  
—文体変化を中心に—

学位申請者： 劉 雪琴

審査委員：

主査：	文化情報学研究科	教授	金	明哲
副査：	文化情報学研究科	教授	矢野	環
副査：	文化情報学研究科	教授	川崎	廣吉
副査：	文化情報学研究科	教授	山内	信幸
副査：	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授	田畑	智司

要 旨：

本論文は、宇野浩二の小説作品のコーパスを作成し、データサイエンスのアプローチで計量分析を行った結果を纏めたものである。

第1章では研究の背景と目的について、第2章では計量文体学の分野における先行研究について、第3章ではコーパスの作成、特徴量および分析方法について説明した。第4章では、宇野浩二の病気前後の小説における文体変化について、第5章では病気前後の文体変化の発生時期の問題について、第6章では宇野浩二の戦後の作品における文体変化などについて、第7章では同時代の作家との比較を通して、宇野浩二とその作品の文壇における位置づけについて分析を行った。第8章では、第4章から第7章までの議論を振り返り、本論文の達成点および残された課題を整理した。

従来の定性的研究では、病後の作品には仮名の使用率が増加した可能性があるとされてきたが、本研究の分析により仮名の使用率は減少したことが判明した。同じく、文体変化は「枯木のある風景」から一変した、とされる文壇の通説とは異なり、精神病の発病と並行して変化したと見るべきであることが解った。以上のように、従来の研究とは異なる新しい結果を提示している。また、執筆の中断が宇野浩二の文体変化の契機であることはおおむね間違いないが、病前から病後、戦前から戦後という時期の変化よりも、文体の変化が先に現れていることが解った。なお、同時代の作家に比べ、宇野浩二の作品は特徴を持ち、病前・病後、戦前・戦後といった流れと共に変化した、特に戦後の作品は宇野浩二の独自の文体特徴が色濃く現れていることを明らかにした。

本論文により宇野浩二の作品が深く掘り下げられ、文学作品の計量分析、文体変化の要因分析、文体と病理学との関連性分析などの可能性をさらに広げたと考えられる。よって本論文は、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2019年1月22日

論文題目： 宇野浩二の文体的特徴に関する計量的研究  
—文体変化を中心に—

学位申請者： 劉 雪琴

審査委員：

主査：	文化情報学研究科	教授	金	明哲
副査：	文化情報学研究科	教授	矢野	環
副査：	文化情報学研究科	教授	川崎	廣吉
副査：	文化情報学研究科	教授	山内	信幸
副査：	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授	田畑	智司

要 旨：

学位申請者は2016年度4月より本学大学院文化情報学研究科博士後期課程に在学しており、国内会議および国際会議での研究発表を通じて研究活動を積極的に行い、それらの成果を計量国語学会と情報知識学会の論文誌に2本の論文として公刊している。また、英語の語学試験にも合格し、2回の国際学会で英語による発表を行っていることから語学（英語）について十分な能力を有していると認定されている。

2019年1月22日火曜日9:00から約1時間20分の公聴会と30分の審査会において、種々の質疑応答の結果により博士（文化情報学）（同志社大学）の学位を有するに十分な学力を有することを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 宇野浩二の文体的特徴に関する計量的研究 ―文体変化を中心に―

氏名： 劉 雪琴

要旨：

宇野浩二は大正から昭和にかけて文壇で活躍した福岡出身の小説家である。半世紀近くにわたる創作の軌跡をたどると、精神病の発病や第2次世界大戦、妻の死去で執筆を2回中断したが、後に見事に文壇への復帰を果たした複雑な経歴を持つ作家である。執筆の空白期間を境として、宇野浩二の作品は多様な変貌をとげたと言われているが、文体の変化と時期は、研究者の知識や世界観によってしばしば見解の相違があり、いまだに全体像が見えない謎の作家である。

本研究は伝統的な文芸評論を起点とし、計量文体学のアプローチによって宇野浩二という作家の文体的特徴を捉えようとするものである。具体的には、以下に示している病気後の文体変化、文体変化の時期の分析、戦後作品の特徴、同時代の作家との比較分析という4つの問題を解明することにより、宇野浩二の文壇における位置づけを検討し、宇野文学の全体像を浮き彫りにすることを試みる。

- (1) 宇野浩二の病気前後の文体変化に関する分析
- (2) 文体変化の時期の分析
- (3) 宇野浩二の戦後作品の文体特徴に関する分析
- (4) 宇野浩二と同時代の作家との比較分析

本論文は全8章で構成されている。第1章で、研究の背景と目的について述べる。第2章では、計量文体学の分野における先行研究を紹介し、第3章では本研究で用いるコーパス、特徴量および分析方法を説明する。第4章、第5章、第6章と第7章では、(1)、(2)、(3)、(4)の4つの問題についてそれぞれ分析し、さらに分析によって得られた結果に対して詳細な検討を行う。第8章では、第4章から第7章にかけての議論を振り返り、その達成点および残された課題を整理する。以下、各章の要点について述べる。

第1章では宇野浩二の生涯を紹介し、昭和2年の精神病、第2次世界大戦および妻の死去が宇野浩二に与えた影響に関する文芸評論を手掛かりとし、文体変化についてのいくつかの説または変化が生じた背景を整理した上で、宇野文学に関する新たな研究課題を提起する。

第2章では、計量文体論の領域における従来の知見や学説を概観する。計量的文体分析の可能性及び伝統的な文体研究のアプローチとの相違点を述べる。さらに、日本語の計量的文体分析における代表的な先行研究を紹介し、計量的分析で多く用いられている特徴量と分析手法についてまとめる。

第3章では、本研究の計量的文体分析で必要となるテキストや解析用ソフトウェア、特徴データの抽出及び分析手法について述べる。研究の目的に応じ、宇野浩二及び彼と同時代に活躍した作家の作品のコーパスを作成した。宇野浩二のコーパスは、病前、病後、戦後の3つの時期に発表された28編、25編、14編の作品で構成されている。比較分析に用いるコーパスは、岡本綺堂、島崎藤村、徳田秋声、泉鏡花、永井荷風、正宗白鳥、菊池寛、室生犀星、江戸川乱歩、海野十三、横光利一、井伏鱒二、川端康成、堀辰雄、坂口安吾、中島敦、太宰治、織田作之助、三島

由紀夫といった宇野浩二とほぼ同時期に活躍した作家のそれぞれ 15 編の作品で構成される。本研究では仮名の使用率、語彙の豊富さ、文の長さ、読点の打ち方、タグ付き形態素の使用率、形態素タグの n-gram (n=1, 2)、文節パターンを特徴量として用いる。読点の打ち方に関しては、読点前の文字と品詞の 2 つの側面から分析を行う。本研究で用いた計量的分析手法は、主に統計的検定、対応分析、階層的クラスター分析、トピックモデルおよびエイダブースト、高次元判別分析、ロジスティック・モデル・ツリー、ランダム・フォレストとサポート・ベクター・マシンの 5 つの分類器による判別分析である。

第 4 章では、宇野浩二の病気前後の小説に注目し、病気後の文体変化について分析する。統計的検定と対応分析の結果、病前と病後の作品はそれぞれ異なる特徴を有していることがわかった。病後の作品では精神病のため、語彙が乏しくなり、仮名の使用が増加した可能性があると言われてきたが、本研究の分析から病後の作品では仮名の使用率が低く、後半の作品で語彙がやや乏しくなる傾向があることがわかった。執筆の空白期間に近い作品では、読点の使用率が最も低く、病後になればなるほど高くなる傾向があった。読点の多用はリズム感を生み出すことができる一方、文学的評論で指摘されている饒舌さや流暢味の喪失にも影響していると考えられる。また、病前の作品は人称代名詞を多用し、助詞「や」、「とか」を用いて並列的な語句を並べ、動詞の「テ」形と読点で文を区切るといった特徴を持っている。一方、病後の作品では人名名詞が多く使われ、語句（特に、名詞）を読点で区切って羅列し、動詞の連用中止形と読点で文を区切るようになった。さらに、名詞の使用率は病前に比べ病後の作品が高く、接続詞、副詞、連体詞などの表記については、病前では漢字、病後では仮名を使う傾向がある。口語体の文体特徴を持っていた宇野浩二の文章は、上述の名詞の使用率の増加や文の区切り方の変化などによって固くなったことが考えられる。なお、入院する前に発表された「日曜日」という作品は、病後の作品に似た特徴が見られ、入院する前に文体は既に変り始めていた可能性があることが示唆される。

第 5 章では、第 4 章の分析で残された文体変化の発生時期の問題について分析を行う。宇野浩二が入院する直前に発表された 4 編の作品に焦点を当て、その特徴が病前と病後のどちらのグループの作品に類似するかを分析する。なお、以前に書き留めた原稿に加筆して発表することやテキストの長さなどが作品の特徴の分析に影響を与える可能性がある。そこで本章では、すべての分析対象となる作品に対して文字の分割処理を行った。分割したテキストから特徴量を抽出し、対応分析と判別分析を併用して分析を進めた。その結果、形態素の使用には変化が見られなかったが、読点と読点前の一文字および文節パターンの使用では、「日曜日」は病後の作品に似ていることが確認された。形態素タグの構成率では 12 編の作品はすべて病後の作品に類似している。形態素タグの bigram では、「軍港行進曲 2」、「軍港行進曲 3」、「日曜日」、「続軍港行進曲 1」、「続軍港行進曲 2」、「続軍港行進曲 3」が病後の作品に似ている。読点と読点前の品詞の場合、形態素タグの bigram とほぼ同様の結果になっているが、「恋の軀 1」と「恋の軀 3」も病後の作品に似ていることが確認された。従って、1927 年に発表された作品では、記号と品詞の使用における変化が先立って現れていると言える。宇野浩二の文体変化は、病後の「枯木のある風景」から一変したとされる文壇の通説とは異なり、精神病の発病と並行し、入院した年（1927 年）に発表された作品から現れ始めたと見るべきである。

第 6 章では、宇野浩二の戦後の作品における文体変化について分析を行う。病気前後の作品に注目する研究が多いが、第 2 次世界大戦以降の作品においても文体が変化したと言われおり、病前と病後の 2 つの時期にわけて議論するだけでは不十分であるとしばしば指摘される。本研究では、対応分析とトピックモデルを用いて 3 つの時期の作品について分析を行った。その結果、本研究で扱っている宇野浩二の 67 編の小説は、おおよそ病前、病後と戦後の 3 つのグループに分かれ、宇野浩二の創作時期を病前、病後と戦後にわけるのが妥当であることがわかった。また、2 回の執筆の中断が宇野浩二の文体変化の契機になっているが、病前から病後、病後から戦後という時期の変化より文体特徴の変化の方が先に現れていることがわかった。病前、病後、戦後の

作品では、代名詞、名詞、記号を含むパターンがそれぞれ特徴的項目として挙げられる。さらに、戦後の作品では、仮名と読点の使用率が最も高く、病前と病後の作品より少ない語彙を駆使して物語を書くことが確認された。また、動詞の連用中止形と読点を用いて文を区切るという特徴に関して、戦後の作品は病後の作品に似ている。

第7章では、同時代の作家との比較分析を通して、宇野浩二とその作品の文壇における位置づけについて分析を行う。宇野浩二が活躍していた時代は、個性のある作家が輩出された時代であるが、彼の作品を他の作家の作品と比較する研究が見当たらない。本研究では、対応分析と階層的クラスタ分析を用いて、宇野浩二を含めて合計20人の作家の作品に対して比較分析を行った。その結果、同時代の作家に比べ、宇野浩二の作品は独特な特徴を持ち、病前、病後と戦後といった流れと共に変化していることがわかった。特に、戦後の作品は他の作家から離れ、宇野浩二の独自の文体特徴が色濃く現れている。さらに、病前の作品は堀辰雄、戦後の作品は泉鏡花の作品に類似し、それぞれ代名詞、記号の多用が特徴として挙げられる。また、宇野浩二の作品の文長は、他の作家より明らかに長いこと、病前、病後の作品や他の作家の作品に比べ、戦後の作品の語彙量が少なく、読点の使用率が高いことは特筆すべき特徴である。

第8章では、第4章から第7章までの議論を振り返り、本論文の達成点および残された課題を整理する。